



風

——サイクリストと風のエピソード——

山 本 秀 男

上州名物

上州名物は嬭天下に空つ風だ
という。日本全国に知られてい
るかどうかは知らないが、かな
り有名であるらしい。実は私の妻も上州産
だが、私が呑気なせい、十年運添うて、
そう思つたことはない。そんなわけで上州
名物も嬭天下の方は、信用していない。
ところが空つ風の方は、どうしてなか
か立派なもので、同じ名物でも温泉場や観
光地の羊羹とはわけが違う。

数年前になるだろうか。前橋を訪ねたと
き、こんなことを教えてくれた人がある。

前橋から北方をみると右に赤城左に榛名
が、どつしりとした山容をみせているが、
その間の上越国境の山が見える。晴れた日
に、その山の上に雲が顔を出したら、ま
まなく風が吹くという。土地の人がいうんだ
から、大体間違いない事らしい。

これには私も一寸興味をもつた。話をき
いた翌日、ちよと晴れた日だつたので教
えられた山々を眺めていた。十一時頃だつ
たらうか、雲が出たではないか。胸がおど
つた。しばらくして、本当に吹いて来た。
しかも相当な強い風が——。それはたしか
春だつたと思うが、はたして一年中そのと

おりなのかどうか聞くのを忘れた。それ
しても見事に当つたのには、すつかり嬉し
くなつた。

前橋を訪ねることも回を重ねてこれもだ
いぶ前だが、自転車中仙道を高崎廻り
前橋へ入つたことがある。そのときは雲を
みながつたが、前橋へ入る前から、えらい
風に吹かれ、大利根橋を渡るときには、空
つ風の暴威にやささかきつてしまつた。
こうなると、嬉しくなんか。名物とは
戴きがたいものであると思われた。

こがらし

あちこち旅行してみても関東の
空つ風という言葉のあることを
知つた。きいてみると木枯の冷

たさをいうらしい。そういえば北海道や東
北の人たちが、川崎あたりの大工場に就職
して、その会社の社宅や寮に随分来ている
。その人たちにとつて、関東の空つ風は大
変しのぎにくいらしい。そういわれてみる
と、山本有三の名作「風」の冒頭の一章が
思い出される。記憶力が小さいので、と
ういふ語を新新聞紙がガサゴソと、むなし
音をたてながら転がっていく、といつたよう

な描写があつたように思う。そんな感じは
私の身辺では、毎年冬になると味合わされ
るので、当り前だと思つて来たが考へてみ
れば、しのぎにくい寒さというより何か都
会のわびしさの方が強いと思う。

去年の五月号の表紙写真をとりに、入間
川へ行つたときだから、たしか三月の終り
だつたと思う。上々の天気は夕方まで続い
たが、石神井公園を過ぎた頃から、ものす
ごい風が吹き出した。横なぐりの風だが、
湿り気の全然ない街中を吹きぬけるのだか
ら、大変な埃を横面にぶつけてくる。ま
もとに眼をあげては走れない。道が広くなれ
ばなるほど風当りは強くなる。散々苦勞し
てやつと新宿についたわけだが、その時、
同行の大島君が「関東の空つ風は凄いと
いつた。彼は半月ほどまえに、永い間育つ
た関西から上京したばかりだつたのだ。彼
ばかりではない、私もほとほとあきれるほ
どの風であつたのだ。

伊豆の風

私は気象というものに、きわ
めてうとい。せいぜい知つてい
るとすれば、風とは気圧の高い

所から気圧の低い所へ空気が移動する現象
をいう、ということぐらいである。それも
国語辞典をみて覚えただ知識である。だから
専門のことはわからないが、感覚的にはい
ろいろなことを覚える。方言に白南風とい
う言葉があるのを知つたのは、白秋の歌か
らだが、梅雨明けの風ださうである。何か
明るい気分がでさうな感じのする風

の名前だ。これと对象的なのに黒南風とい
う言葉もあるさうだ。伊豆の漁師の方言と
きいたが、たしかめたことはない。この風
は梅雨前に吹く風だという。

風の呼び名に方言があると同様、風の吹
き方も処々方々、けつして同じでないら
しい。およそ風も自然現象であるからには、
観察という持続的な忍耐を必要とする手続
をふまねば、特殊地域の風の吹き方はわか
るまい。だが案外に多くの人々のいうこと
は概して信用できるさうだ。
たとえばサイクリストが伊豆半島をたず
ねた場合、たいてい西海岸をまわつて東海
岸にでているさうだ。これも一つは季節に
よる筈だが、伊豆という西の強い風が私
の頭にもいつの間にかこびりついてしまつ
ている。みんなも同じことを考へているの
ではなからうか。誰しも風に向つて走る苦
しさを知つているし、風に追われれば坂の
登りも何割か楽なことも経験者は知つてい
る。そんなことでみんな伊豆半島はまず西
側から走るのさうだ。

風のむき

明日には明日の風が吹く、と
いう言葉がある。私はこの言葉
は屁のようなもので、臭いだけ

で益はないと思う。それよりも季節には季
節の風が吹くという言葉が作られてもいい
と思う。伊豆半島の西風も季節風で、とく
に寒い間中猛威をふるうのだと思う。ただ
、伊豆という冬なお暖かい所だといふ観
念がある。だから冬になるといきたくな

つた。しばらくして、本当に吹いて来た。しかも相当な強い風が——。それはたしか春だつたと思うが、はたして一年中そのと

てい語んじることではできないが、木枯の吹く街を新聞紙がガサゴソと、むなししい音をたてながら転がっていく、といったよう

う言葉があるのを知つたのは、白秋の歌からだ。梅雨明けの風だそうである。何か明るい気分の旅ができそうな感じのする風

に寒い間中猛威をふるうのだと思う。ただ、伊豆というと冬なお暖かい所だという観念がある。だから冬になるといきたくな

る。そして伊豆は西風となるのだろう。

東京周辺では、季節の風が目立つのは、やはり春と冬だろう。もちろん夏にも秋にも風はある。だが、風のためにサイクリングが苦しい状態におかれることは稀で、あとすれば二十日にやつてくるような台風である。

春は南または東南の風が吹く。それも相当強く吹く。そして大てい午後の方が強く吹く。だから日帰りのコースの選択はむずかしい。冬だと北か北西か西である。この風向きは私の住む所には都合がよい。いま武蔵野をたずねるとしたら、ずいぶん広い武蔵野だが、帰りは大てい追風になる。それは私の家が武蔵野の東南端に当るからである。

そうはいうものの、風は毎日きまつて必ず吹くものではない。どうかすると春でも北風の日があるし、冬でも南よりの風が吹く日もあるくらいだ。そこで、つい希望的観測をする。

私たちが社の連中が、東京の部品メーカーの人達と一緒に古利根方面へポタリングしたのも、そんな希望的な観測によるものだった。このコースは、三、四年前の春NCTCが撮影のためにポタリングした所だがそのスライドをみると、帰路はみんなドロツプバーの下を握っている。今の八ミリ映画ならもつと実感がでるんだらうが、私たちは、そのかつこうをみただけで相当に吹かれて苦しんでいるなど、すぐわかるほどだった。それと同じコースを同じ季節に走

ろうというのだから、風に悩まされたいという保証は全然ない。それでもきまつてしまったコースだから実行してしまつた。その結果私たち一行は、車の進行方向が北から南へ廻転したと同時に、たちまちチェンジ・ギヤをローに落さなければならなかつた。昼食後古利根ぞいに、東京へ東京へと三十台もの自転車が、のろのろと列を連ねたことはいまでもない。

天気予報

当外れということもある。普通、乗物利用の行楽客の場合、当外れといえば、大体雨に降られたときである。こんなとき誰でも気象台の予報が違つたと文句をいう。考えてみれば

確定報ではないんで仕方がない。間違いと気狂いは江戸の間中にもあるんだと、昔から云われているんだから我慢できないこともない。それはそうだが、現在雨が降っているのに、「午前中は曇りですが夕刻から雨になりましょう」としやあしやあ放送するから、またかと腹が立つ。

四月のCFCJのクラブ・ランで丹沢のヤビツ林道を登つた日である。雨の方は最初から降つているんで文句はなかつた。ケーブをきて黙々とヤビツの頂上まで登つたわけである。それが頂上で雨が上つた。気をよくして三角山まで一気に降りた。ところで誰かの携帯ラジオが、天気予報をキャッチした。曰く西南の風——と。ますます気をよくしたのは勿論である。厚木——上鶴間の間を除いて全部砂利道で、ぬかつてい

る所もあれば、バラスの浮いている所もある。大山街道を走るのであるから、西南の風というのは助けの神みたいな気がしたのも無理はない。私たちは追風に乘つて大山街道を——と思つたが、事実は全く逆だつた。善波峠のトンネルを出て、ダウンヒルにかかる一向に加速されない。その途端に憂うつになつたのも、雨中のヤビツ林道を登つて少し疲れが来ていたためかもしれない。が、それから二子玉川につくまでの間再び降り出した雨と、天気予報の外れとで完全にいじめられてしまつた。天気予報の外れがこんなに、しやくにさわつたことはなかつた。

耳ぼつ

風も恐い。大きな峠の降りには、たいてい方角がわからぬほどくねくねと曲つている。だから風の吹かぬ方角や部分的に風の通らぬところもあるかわりに、ものすごい勢いで風のとおりぬけるところもある。いい気持で下りにかかり、最初のカーブで強い風に突

然吹かれると、フラツとすることがある。もし風に飛ばされたら千尋の谷底が口をあけて待つている。だから風の強い日はカーブするとき、どんな強風にもあおられないだけの態勢が必要である。

また、恐いのは風で他の音が聞えなくなることである。それもおとなしくしていればいいものを、私などは、どうも折角のダウンヒルでスピードがでないと思ふくいな。だか向かい風に吹かれると、踏んでも

スピードを上げようとする。そうになると、耳はますます風の音に占領される。御坂峠の下りで、危い目にあつたのも、そんな下り方をしているときだつた。カーブにかつたとき、突然ダツトサンが現われた。むこうがクラクションを鳴らしたかどうかはわからないし、鳴らしてもおそろしく聞えなかつたかもしれない。ましてエンジンの音などきこえよう筈はない。だから突然の車に驚いたわけである。幸にして後輪をスリツプさせて除けることができた。随分上手に逃げたようでも、計算ではなく本能的に逃げたわけで、確率としては非常に薄い方法をとつたわけである。

空抗

ゆるい坂も二〇軒も続くと嫌気がさす、そんな私なのに、この連休に吾妻の日陰道を登り、大戸から須賀尾、薬師温泉へと、長い登りが一面苦にならなかつたのだからこれは調子がいいと思つた。連れの二人も調子がいいという。何のことはない、広い運動場のある学校で休憩したら後から風が吹いて

いた。大した風ではないが追い風だと随分楽なものであると笑い話にしたが、山道でも登つていなければ、これ程の風の有難味はさして感じなかつたらうと思う。

こんなときである。舗装の良好な路面を時速十五軒で走つた場合七七％が空気抵抗で、二〇％が路面抵抗で、三％が廻転部抵抗だという説を思いだすのは——。